
とある男の I S な話

ぱりお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男のISな話

【Nコード】

N2983Z

【作者名】

ぱりお

【あらすじ】

伊波涼太はどこにでもいる中学3年生の男の子。しかし、ある交通事故に巻き込まれ、早すぎる死を迎えてしまう。そして次に目覚めた場所は天国ではなくどこかの研究所。

そこでであったのがISの登場人物篠ノ之束と量産型IS打鉄であった。

涼太「ありえない。こんなことあるわけない・・・。」

そんな伊波涼太を交えたちよっとおかしいISストーリーが今始まる。

作者の初投稿作品です。 よろしく願います。
それと作者はアニメと二次創作での知識しかないので、そこそこ
るもよろしくです。

プロローグ（前書き）

がんばります！

ブローグ

ブローグ

ドオオオン！！

その音とともに俺は宙に投げ出された。

ああ、死んだな。直感的にそう思った。

その日、俺こと伊波^{いなみ} 涼太^{りょうた}は上機嫌だった。なんせ2年間俺の片思いだと

思い込んでいた女の子にいきなり告白されたのだから。もちろんOKした。即効でOKした。

しかも「これから涼太くんってよんでもいい？」って上目遣いで聞かれたときには死んでもいいって思ったよ。いやむしろ萌え死ぬところだった。

神様ありがとう！いるって信じてないけどありがとう！

ラブラブな俺達は手を繋ぎながら下校した。やべえ俺今人生で一番幸せだ。

彼女と喋りながらそんなことを思う。だが楽しい時間ほどすぐ過ぎる。彼女の家に着くのはあつとゆう間だった。

「ばいばい涼太くん。また明日ね！」

花の咲いたような笑顔で手を振る彼女。手を振りかえし、家に入っていくのを見送る。

「……ちくしょうかわいすぎるだろ！俺を殺す気がよくそつ！

ニヤける顔を両手で押さえながら歩き出した。あ、そういえばとあることを思い出す。

「小説買いにいくの忘れてた。」

帰りに買うはずだった小説のことをすっかり忘れていた。家に帰る前に本屋に行こう。ここからそう遠くないはず。

5分くらい歩き本屋のある大通りに出た。近くの公園では子供達がサッカーをして遊んでいる。

楽しそうだなとおもいながら公園の横を通りすぎる。

そっぴい小さいときよくここでサッカーしたな。俺超へたくそだったけど……。

あのころディフェンスしかやらしてもらえん『プーーーーー
ーーーー』な、なんだ？

音の聞こえたほうを見ると公園にいた一人の男の子がボールを追っ

て道路に飛び出していた。

トラックの運転手はあわててブレーキを踏んだがもう手遅れのようにだ。そのまま男の子に突っ込んで行く。

危ないっ！！

考える前に体は動いていた。全速力でその場に向かい男の子を突き飛ばす。直後に、俺はトラックに吹き飛ばされた。そして、地面に叩きつけられ血を吐き出す。

「ぐはっ！！・・・はぁ・・・はぁ・・・」

なんとなくわかった。死ぬんだろうな俺。なんだか呼吸しにくいし。

それはそうと男の子をほうを見る。泣いているが無事のようなだよかった・・・。仰向けになり空を見る。むかつくほどきれいな青空だった。

神様の・・・くそつたれ・・・。

そうつぶやきながら、意識を手放した。

第1話 トリップしちゃいました。（前書き）

一応なんども読み直していますが、誤字などあるかもしれません。

それでも大丈夫な方はどうぞー！

第1話 トリップしちゃいました。

side ???

ここをこうして、ここは・・・こうかな。え・・・あれえ？あーやっぱりワンオフアビリティの容量が大きいせいかなー・・・。それに腕パーツのせいで全体のバランスがおかしいかも。うむむ・・・」
緊急事態発生。緊急事態発生。』へ？

『侵入者を発見。』

侵入者！？ここがばれたって言うの？でもどうやって・・・。

『現在、IS保管庫にいます。』

私を捕まえにきたのかな？それともISの技術を奪うため？どっちにしる私の研究を邪魔するなんて、いい度胸だね！

どんなやつか顔をみてやろう、そしてココに来たことを後悔させてあげるよ。

私は保管庫に向かった。

中に入ってみるとそいつは床に倒れていた。どうやら気絶しているようだ。勝手に人様の家にあがりこんで何がしたいんだらうこいつは・・・。

あ、起き上がった。周りを見渡しているようだ。いっくんと同じ年位の子かな。まあ関係ないか、そんなの。

「ねえ、君。勝手に家に上がりこんで何をしているのかな・・・。」
どうせ始末するんだしね。

side 涼太

「・・・た!・・・うた!」

・・・。

「・・・うた!・・・きなさい!」

ん。母さん?もうちょっと寝かせてくれよ・・・。

「何言ってるの!早く起きないと遅刻するわよ!」

・・・あーもうわかったよ。朝から大声だすなつて。
まだ眠いが母さんがうるさいので起きる事にする。だいたい今何時だよ。目を擦りながら部屋の時計を見る、ってあれ時計がない。
それどころか自分が寝ていた場所は鉄板の床だった。なんで俺こんなところに・・・?必死に寝る前のことを思い出す。

たしか、昨日は2年間片思いだと思ってた子に告白されたんだつたよな！もちろんokして、そのまま一緒に下校。家まで送って・・・。小説買い忘れたの思い出して、本屋に行つて、その途中の公園でサッカー・・・ん？・・・サッカーやってた子供が・・・！???！? ?!?!?!

そうだ思い出した！俺トラックにひかれたんだ！じゃあココは病院か・・・？いやいや、病院がこんなメタルチックな場所であつてたまるか。てか工場にしか見えないし。周りを見回してみると、ロボットのようなものが目に入った。

!? あれつてもしかし「ねえ、君。勝手に家に上がりこんで何をしているのかな・・・。」

突然誰かに話しかけられた。声から察するに女性だろう。でもなんだろ。この声、どこかで聞いたことがあるような・・・。そんなことを思いながら、うしろを振り向く。

え・・・?

いやいやいや・・・ありえない。こんなことあるわけない。

「篠ノ之 束・・・?」

だってそこにいたのは俺がはまっていたアニメ【インフィニット・ストラトス】にでてくる登場人物 篠ノ之束^{しののたはね}だったのだから。

第一話 トリップしちゃいました。

「それで、君はなんでココにいるのかな？」

いや、まて本物の篠ノ之束なわけないだろ。なに考えてんだ俺。きつとコスプレしたそっくりさんに決まってる。そうだ。絶対そうだ、ハハハばかだな俺！・・・落ち着けよ。

「い、いやあの、自分もなんでココにいるのかよくわかってなくて・・・。」

本当のことだ。嘘はついてない、けど・・・。

「そんなデタラメ束さんが信じると思ってるの？」

うわ、めっちゃなりきってる。声も超にってるし。ってそんなことはどうでもいい！

やっぱ信じてもらえないか・・・。とりあえず事情を話してみよう。

なにも言わないよりマシな気がする。

「ほ、本当なんです！実は――。」

「・・・トラックに轢かれて死んだとおもったら、ココで寝てた？
つくならもつとマシな嘘にしなよ。」

「嘘じゃないんですってば！？」

イラついているご様子。あれ、これ逆効果だったんじゃない。

「じゃあ例えば君は自分の家に不法侵入してきたヤツに『気付いたらココにいました』なんて言われてソレを信じられるの？ねえ。」

「そ、それは・・・。」

無理だ。信じられるわけがない。迷わず警察に通報するに決まっている。

「もういいよ。どうせ君はココで死ぬんだから。」

「ちょー！！な、なんで！？」

「当然でしょ？束さんの秘密の研究所を見られちゃったんだから。
このまま返すわけにはいかないよ。」

――カチャ。

女が銃を構える。俺は驚いて腰を抜かしてしまった。そりゃびびるだろ。銃口向けられたのなんてはじめてなんだから。

「私も本当はこんなことしたくないんだけど、居場所を知られるとめんどーな事になっちゃうから、しょうがないよね？」

しょうがなくねーよ。他に方法なんていくらでもあんだろ！監禁とかさ！……どっちもいやだけど！女はじりじりと俺との距離を詰めていく。腰が抜けて立てないので、手で体を支えて後ろに下がる。背中が何か当たった。たぶん壁だろう。

はぁ……せつかく生きてたのになぁ……。

俺は覚悟を決め、目をぎゅっとつぶる。直後に銃声、じゃなく後ろで何か音がした。

—— キュイイイイン！

な、なんだ？

「まさか……反応してる！？でも彼はどう見たって男性だし……ブツブツ……」

女がなにかつぶやいている。何をブツブツ言っているのか気になったがとりあえず後ろで動いている何かを確認することにした。

「ま、マジかよ……。」

そこには同じくアニメ【インフィニット・ストラトス】に出てくるIS”打鉄”が置いてあった。

さっきチラっと見えたけど、やっぱそうだったのか……。じゃあ目

の前のは本物の篠ノ之東で、ここはISの世界ってか！？せつかく冷静になれたのにまたパニくってきた。ありえねえええええええ！？

「ねえ君。」

「（どうしてこうなったああああ）・・・へ？」

「じつは女の子だったりする？」

「んなわけねーだろ！どう見ても男だろーが！！」

あ、やべえ。パニくり過ぎて口調が・・・。お、怒ってない、よな？

「やっぱり男性か・・・でもそしたらどうして・・・ブツブツ・・・」

よかったー怒ってないっばい。女は一通り悩んだ後、また俺に質問する。

「君。名前は？」

「伊波。伊波涼太、です。」

どうしたんだ？いきなり名前聞かれたけど、もしかして殺されずにすむんだろつか・・・。

「そう。じゃあ伊波。君に2つの選択肢をあげよう！」

なんかいきなりテンションあがってるー・・・。ん？選択肢？

「1！ココでおとなしくやられる。」

ふざけんな。いやに決まってる。

「2！ココで私の研究をお手伝いする。」

・・・・・・は？

「・・・・・・2で。」

「おっけー。じゃあこれからよろしくね！伊波。」

「ま、まってください。なんで急に気が変わったんです？」

不気味すぎる・・・・・・なにか企んでるのか。

「ん？あーそれはね、君が世にもめずらしい、男性でISを動かせる人間だからだよ！」

・・・・そーゆーことか。つまりあれだ、モルモットになれと。正直嫌だけど死にたくないしな・・・・・・はあ。

「でも、いいんですか？得体も知らない俺に研究の手伝いなんかさせて。」

「問題ないよ。今から君にはこれをつけてもらっから。」

と言ってなにかを腕に取り付けられた。・・・・腕輪？

「伊波がなにかしようとしたらそれが手首をスパーン！だから大丈夫

夫っ！」

大丈夫じゃねえ！？なに笑顔で物騒なことってんのこの人！？外れる！この野郎！！スパーンなんて嫌だ！！！！

「これからよろしくねっ！」

「……よろしくお願いします。」

ホント……神様のくそつたれが……orz

第2話 その後の日常（前書き）

主人公は仲良くなるとすぐ調子に乗るタイプの人です。

第2話 その後の日常

第2話 その後の日常

「ふむふむ。なるほどなるほど。身長は172cm 体重は56kg

視力両目ともに1.5 運動神経まあまあ 好きな食べ物ハンバーグ、と！」

「あのーそのデータは意味あるんですか？特に好きな食べ物・・・。」

「あるよ、もちろん。その人のデータを元にISを組み立てると使いやすさが全然違うからね。」

あと食べ物も聞いてみただけー。ハンバーグ、ぷっ。」

なんでハンバーグで笑ったの？ハンバーグさんDISってんの？
ちよつと表でrすいません調子乗ってました。

束さん（って呼べって言われた）の研究の手伝いをする事で、
生かしてもらえることになった俺は、さっそく身体検査をさせられていた。

てか初対面るときと全然雰囲気ちがくね・・・？ま、断然こっちの
ほうがいいんだけどさ。

「それでまあ、これから伊波には実際にISを操縦してもらうことになるんだけど、

動かし方とかわからないよね？」

「はい。動かし方はもちろんIS関連の知識はほとんどないっす。」

そりゃそうだ。アニメ見ただけなんだから。

女しか乗れないってことぐらいしか覚えてない。俺男だけどさ。

こんなことになるなら小説も買っておくんだっただなあ……。

「そつか。じゃあこれから一週間この天才東さんがみっちりISの
なんたるかを

叩き込んであげるから大船に乗ったつもりでいなさい！ぶいぶい！」

「……はい。」

こうして一週間、ISについて猛勉強した。

正直教え方がうまかったので全然苦ではなかった。さすが天災。

——— ??? ———

今俺は名前もしらない荒地に突っ立っていた。

ここどこだよ……。日本……。なのか？

「それじゃ今日からISを動かしてもらおうよ。いいデータが取れる
ようにがんばろうー！」

目の前にISが置いてある。”打鉄”だ。
アニメみてて思ったけど、かなりかつこいいよなこいつ。武器が刀
つてのがさらにいい！

このまま眺めててもいいのだが、束さんの目線が痛いのでしようが
ないから乗ってやる。

べ、別にアンタの目がこわいから乗るわけじゃないんだからね！！

「どう？一応伊波に合うようにちょちょっといじってみたんだけど。

」

「すごくしつくりきます。いい感じです。」

ISが体の一部みたいだ。まるで違和感がない。

「でしょでしょー？それじゃ適当に動いてみてー。」

言われたとおり好きに動いてみる。

えーと歩行は・・・

ガシャン、ガシャン。

おおおお！！やばいテンションあがる！なんだこれ、新感覚だ。
チンさむはんぱねえ！

じゃあ次は飛んでみよう。イメージ、イメージ。

——ふわっ。

おおおおおおお！！！！

俺飛んでる！超飛んでる！すげえ！マジISすげえ！うええ酔って来たー！

おろろろろろろろ。

しばし休憩中……。

てゆうか空からまわり360。見渡してもなにもないな。ひたすら荒地だ。

休憩後また空にあがり、空中散歩を楽しんでいた。酔い止め？そんなのねえよ！

「おっけー。じゃあ一旦戻ってきてー。」

いきなり目の前の画面に束さんが映り、話しかけてきた。色々考えているうちに結構な距離飛んでいたらしい。

んじゃ戻るか。機体を旋回させて束さんの元に飛んでいく。

ようやく束さんをみつけ、高度をさげる。そしてふと思う。

「あれ……。そっいや、どうやって減速するんだっけ？」

ブレーキはどこですか？

東さんが近づいてくる。いや、正確には俺が近づいているんだが・・

やば。まじでどうすればいいんだっけ！？このままじゃ東さんにぶつかる！

そ、そうだ。体をそらすイメージしてもうおせえ！！

「うわああああああああああ！！」

「ええええええええええええええええええええええ！？」

ドオオオン！！

爆音とともに俺顔から地面につっこんだ。何も見えない。

埋まっている頭を引っ張り、周りを見渡す。束さんがいない。近くに見覚えのあるウサ耳を見つける。

ぞ・・・ぞいしていんなといろに・・・！

「た、束さん……。な、なんで……。こんなことに……。orz」

7
 •
 •
 •
 •
 •
 •
 ○
 8

うしろからものすごい殺気がする。いや、気のせいだろう。こんなところに人がいるはずない。

気のせいに決まってる。それより束さんが・・・ちくしょう!!

「くそっ！　いつたい、いつたい誰が束さんを・・・許さない！
絶対にゆ」「てりやあああ！！」「ぶふおおおお！」

突然後頭部に重い衝撃がはしり、再び顔が地面に埋まる。暗い。
首を引っ抜き、とび蹴りをかましたであろう彼女に一言。

「・・・なにするんですか。」

「それはこっちの台詞だよ！　なんで私につっこんできたの！？　危うく死ぬところだったよ！」

しかも意味わからない茶番はじめるし!!」

止め方忘れてたんですもん。てか生きてたんですね。あと茶番とか言うな。

「勝手に殺さないでよ！・・・はあ。次からは気をつけてよね。
ホントにもう・・・。」

さーせんした。以後気をつけます。

「じゃあ、今日はコレぐらいで。はいこれ。しっかりその顔消毒し
ときなよ？」

そういいながら俺に日本酒を渡し、どこかに帰っていった。
これで消毒しろと・・・？　って置いてかないで!?

第3話 VS 束（前書き）

一話の長さってどれくらいがいいのだろうか・・・。

第3話 VS 束

束さんの手伝いをはじめて半年がたった。今ではISの操縦もそこ
そこ様になってきてると思う。

イグニッションブースト

瞬間加速とか使えるようになったんだぜ？

まあ主人公の一夏さんはIS操縦し始めて1ヶ月たたないうちに使
っていた気がするが・・・。

気にしちゃいけない。物語の主人公なんてそんなもんだ。

これが主人公とモブキャラの差ってやつさ。・・・くそがつ！

それは置いといて、最近束さんがあたらしい機体を完成させたらし
い。

なんでも妹の篝ちゃんの誕生日にあげるんだー、とか。あーあつた
なそんなシーン。紅桜だっけ？

「伊波！紅椿の試運転したいから私と勝負して！」

桜じゃなくて椿だった。

第3話 VS 束

半年間打鉄に乗ってきた、戦闘は何度もしている。

この前は白式の機体調整で戦った。零落白夜はチートだと思った。

束さんだけじゃなく無人ISとも戦った。

正直強すぎて笑えなかった。まあなんども挑戦して倒したんだけどな！自慢乙。

「それじゃあ、いつくよー！」

その言葉と同時に紅椿が突っ込んでくる。その両手には2本の刀が握られている。

——
速い！

イグニッションブースト

瞬間加速を使つてないのに、この加速。

それだけでこちらとの性能差がどれだけかけ離れているかがわかる。

交互に2本の刀で攻撃してくる。俺は相手の出方を伺うためしっかり防御、回避に徹つする。

「うがあああ、めんどーだなあ！」

そんな俺にしびれを切らしたのか、紅椿は一旦距離をとり何かをしようとしている。

追うべきか、様子見るべきか、どうする・・・？そんなことを考えているうちにハイパーセンサーに反応。

【前方より敵攻撃が接近中！】

衝撃波！？

とつさに刀で防ぐが、衝撃に耐えきれず吹き飛んでしまう。そこへ2撃、3撃目と追い討ちがせまる。

なんとか体勢を立て直し、横に飛ぶことで回避する。

直後、相手に向き直り瞬間加速で接近。イグニッションブースト反撃開始！

「おらぁ！」

刀を振り下ろし、相手のバリアを削ることに成功する。その後距離をとり相手を伺う。一撃離脱を心がけよう。

奇襲だったためうまく決まったが、これからどうするか。攻撃をよけながら考える。さっきみたいな愚行はしない。

（アニメであんな攻撃使ってたっけ？いや、俺が覚えてないだけか？近接戦闘だけでなく中距離もカバー。加えてあの機動力。やっかいすぎるだろ・・・。）

武器を変えた様子はないので、たぶんあの衝撃波は両手の刀からでているんだろう。

・・・それなら！

敵を中心にした円状に飛び回る。この距離なら回避した後反撃に移

れる！

「ええーい、おちろー！」

来た！紅椿が両手を振りあげる。その瞬間を見計らって、回り込むように瞬間加速。イグニッションブースト

振り下ろされた刀から衝撃波が繰り出されるが、追尾性能がないためすぐ横を通り過ぎる。

「これでっ、どうだ！」

そのまま紅椿の脇をすれ違い様に薙ぎ払う様にで一閃。剣道で言う”抜き胴”だ。

おっし！いい手ごたえ。

すぐさま、紅椿のほうを振り向く。

「いい感じじゃない！伊波！」

・・・って全然効いてないじゃん・・・orz

いくらなんでもそりゃないわ。なにがいい手ごたえだよ・・・。

これじゃただのいたい奴じゃん、取り消したいわー。

【前方から敵攻撃多数接近中！】

紅椿からまたもや衝撃波が接近してくる。ただし、今度はさっきのソニックブーム的なものではなく、

大量の槍みたいなやつである。うん。回避無理！

【EMPTY NOTSHIELDED】

「うんうん、いい感じかな！さっすが天才東さん！」

こうして今回も俺の黒星で幕を閉じた。

翌日。

「そつかそつか。いつくんIS学園に」。――。

東さんが携帯をみながらなにかをつぶやいている。誰かからメールか電話でもきたんだろう。

そっいえばこっちの世界に来たとき携帯と財布だけは制服のポケットに入ってた。

見たら財布は無事だった。携帯はぐちゃぐちゃ。トラックにひかれたんだから当たり前だろうって思うかもしれないが、じゃあなんで俺自身は無傷なのかって話になる。

てかよくよくかんがえたら二次創作のオリ主みたいだよな、俺。

あくだから無傷なのか、納得！・・・できるわけねーだろ。

「あ、そうだ！」

なにか思いついたらしい。ウサ耳と一緒に動いてとてもチャージングです束さん。

「伊波！君もIS学園に入学しなよ！うん、それがいい！」

・・・What？

第4話 きたぞ！IS学園 前編（前書き）

ここからしばらくアニメ沿いです。

第4話　きたぞ！IS学園　前編

・・・はい、とゆうことで5日前、天災東さんの「YOU、IS学園に入っちゃいなよ」

とゆう突拍子のない発言により、IS学園への入学を余儀なくされた伊波です。

その前に学園に入るためにはまず俺がISを使えることをお偉いさん方に知らせる必要があるわけだが、そこは東さん。すでに話を通してあるそうだ。

2人目の男性IS操縦者がたと世間では大ニュースになったらしいが、

研究所から直接このIS学園にきたため正直よく知らない。できれば、前の世界で住んでいた自宅周辺に行ってみたかったが、まあ後で来ればいいだろう。

ちなみにあの物騒な腕輪ははずしてもらった。自由って素晴らしいな！

と言う余談はさておき、俺は現在とある人を待っていた。場所はIS学園の門前。東さんが言うには

「いけばわかるよ！その人はわたしのとーっても大切な幼馴染だから失礼のないようにねっ！」

だそうだ。そこまで言われれば誰のことだかすぐにわかった。
あの人だろ、第一回モンドグロッソ大会の覇者で主人公一夏の姉・

「お前が束の言っていた、伊波涼太か？」

織斑千冬だろ。

第4話 きたぞ！IS学園 前編

「お前は私の受け持つ1 - 1に転入するわけだが――」

廊下を進みながら前を歩く人物に目をやる。この人が主人公一夏の
実の姉、織斑千冬か。
束さんも美人だったが、この人も相当だな。目、怖いけど・

「伊波。聞いているのか。」

いきなり後ろを振り向き、目が合う。先生睨まないでください。超
怖いっす。

「も、もちろんです。それで俺家ないんですけど、寮の部屋つても
う用意されてるんですかね？」

——研究所を旅立つとき、東さんは言った。

「今まで楽しかったよ。これからIS学園でがんばってね！」

そんなこといわれたら帰りにくいよなあ……。寮の部屋用意されてなかったらどうすっかな。

「ああ、話は束から聞いている。あるにはあるんだが……。まあその話は放課後にする。」

あるにはあるんだが何！？すげー気になるんですけど！……。まあ寝ればどこでもいいか。野宿とかまじ勘弁。

「ここがお前の教室だ。私が入れと言うまでここにいろ。いいな？」

話しているうちに教室に着いたみたいだ。なんか緊張してきた。まさかこっちに來てまた学校に通うことになるなんて思ってもみなかった。中学思い出すな、俺彼女できたんだったな……。一瞬。orz

「伊波、入れ。」

織斑先生が呼んでいるので教室に入る。うっし！

ガラガラ。

「今日から諸君らのクラスメイトになる伊波だ。仲良くしてやってくれ。」

教室が沸き立つ。

「えーと、今日からこのクラスでお世話になります、伊波涼太です。これからよろしくお願いします。」

—— きゃあああああああああ！！！

「織斑君に続いて2人目の男の子よ！」

「私好みかも！！」

「顔は普通ね。でも男！」

おい最後のヤツ、でも男ってなんだ。男なら誰でもいいのかお前は。

「えつとよろしくね。伊波君。私はこのクラスの副担任、山田真耶です。伊波凧君の席は織斑くんの隣になります。」

と言われその席に座る。横に今にも飛びついてきそくなやつがいる。
織斑一夏だ。

「な、なに？」

「俺、織斑一夏、一夏って呼んでくれ！お前のことはなんて呼べばいい！？」

すごい目がキラキラしている。女しかない空間に一人放り込まれたんだ。相当つらかったんだろうな。でもあえて俺はこの言葉をおくろつ。リア充爆発しろ！

「涼太でいいぞ。よろしくな！」

「おう！でも涼太が入ってきてくれてホント助かったよ！学園に男一人はつらかったんだ・・・」

遠くを見ながら言う一夏を見てちよつとだけ同情しそうになった。

「それじゃあ、授業を始めます。参考書の13ページを――」

こうして俺の学園生活が始まった。

――
休み時間。

「ぐわああああ。もう全然わかんねえ。」

机にひれ伏しながら一夏が奇声をあげる。大方、授業についていけなくて嘆いてるんだろう。

「涼太はさっきの授業理解できたのか？」

当たり前だろ。こんなの初歩の初歩じゃんか。

「なんで後から来たのに俺よりわかってるんだよおお。」

束さんからISについて教えてもらってなかったら俺もこんな風になってたんだろうな。心の中で感謝しておく。

「あ、あの風君。」

「ん？」

誰かに呼ばれ、後ろを振り向くとクラスメイトの女の子がそこに立っていた。

「授業ちゃんについていける？もし無理そうだったら私が教えてあげようか・・・？」

なんていい娘なんだろうか！この世界に来て初めて普通の女の子に会った気がする。

顔じゃなくて性格のことね。照れながら聞いてくる様子はとてもかわいらしい。頭なでたくなる。

「今のところはだいじょぶかな。でもありがとう。わからない所があったら頼らせてもらおうよ！」

あんまり女の子と喋るのは慣れていないが、（天災をのぞく）こんな感じで大丈夫だろうか。

「う、うん！」

なんか喜んでるし大丈夫そうだ。よかったー。

「ちよ、ちよつと抜け駆けなんてするいわよ!」

「ああー私も！！」

ぞろぞろと女の子たちが集まってくる。てかこの人数他のクラスからもきてるだろ。

でも前の世界ではもてなかったから、正直かなりうれしい。うへへ。

「おい、バカども。鐘がなつたのが聞こえなかったのか。さっさと戻れ。」

「はい！」

「さすが千冬姉。」

おいバカ。先生に聞こえるぞ。

——
 パン！！

「学校では織斑先生だ。何度も言わせるな。」

ほら・・・。

第4話 きたぞ！IS学園 後編（前書き）

オリIS登場です。

第4話　きたぞ！IS学園　後編

――昼休み

「一夏ー。お昼ごはん食べに行きましょー！」

廊下からツインテールの女の子が一夏を呼んでいる。凰　鈴音。中国の代表候補生で、一夏のセカンド幼馴染だ。

「ちょっと、お待ちください鈴さん！抜け駆けは許しませんわよ！」

「一夏。昼食を食べに行こう。」

上からセシリア・オルコット、篠ノ之箒。セシリアはイギリスの代表候補生。箒は一夏のファースト幼馴染であり、束さんの妹だ。全然似てないよな、この姉妹。

「ああ。涼太！お前も一緒に飯食おうぜ！」

一夏が俺を誘ってくる。正直混ざりにくい。

「い、いいのか？」

「おう！もちろんだ。な！皆。」

「別にいいけど・・・」

「わたくしはかまいませんわ」

「私もいいぞ」

「ほらな！いこうぜ！」

そういつて俺の手を引っ張る。

「」「ちよっ！」「」

・・・。

一夏。お前がいいやつなのはよくわかった。だからそろそろ手を離してほしい。

後ろの三人が殺気放ってるから！

第4話 後編

食堂に着いた。

皆それぞれ注文したものを手に、空いていた席に座った。

「自己紹介がまだでしたわね。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。もし授業でわからないことがあったら聞いてくださってかまわなくてよ。」

なんたってわたくしはエリー「私は凰鈴音。2組のクラス代表で中

国の代表候補生よ。よろしくね」「ちょ、ちよっと!」

「篠ノ之箒だ。よろしくな伊波。」

「ああ!それじゃ俺も。伊波涼太だ。皆これからよろしくな!」

なんてゆうか、ホントにぎやかだな。

「それで、涼太もやっぱり専用機もってるの?」

初対面でその呼び方なんスね凰さん。別にいいけどさ。

「いや、持ってないけど。なんで?」

「べつつにー?一夏が専用機持ちだから同じ男のアンタも持ってるのかなあって思っただけよ。」

そついやそんな話聞いたことないな。男でIS乗れるからって専用機もらえるわけじゃないんだな。

「なんで俺だけ専用機なんだろうな。俺が言うのもなんだけど不公平だよな。」

それはお前が”一人目”だからだろ。jk。

「まあ俺打鉄好きだからいいんだけどな。」

これは本当だ。実際アニメみても打鉄がどのISよりも一番カッコいいと思っただけだし。

「変わってますのね。」

そうか？

そんな感じで昼食をとった。昔の中学校生活を思い出して楽しかった。それから午後の授業はほとんど覚えてない。とゆうか聞いてない。知ってる内容だしな。

――
放課後

「なあ涼太。俺今から篤達と一緒にISの特訓するんだけど、お前もどうだ？」

一夏が俺に尋ねる。行きたいとこだけど・・・。

「悪い。今から織斑先生に寮の部屋に案内してもらうんだ。部屋の整理やら色々ありそうだからむりっばい。」

「・・・そうか。それじゃあしょうがないな。」

「また今度誘ってくれ。」

「ああ、またな」

一夏と別れ、教室を出る。まずは職員室を探さな「伊波。」・・・く
て済んだ。

「織斑先生。待っててくれたんですか？」

「ああ、お前まだこの学園についてあまり知らないだろ。迷子にな
られても困る。」

なるほど。この時折みせるやさしさに女子達はやられたのか。少し
わかった気がする。

「何ボサつとしている。置いていくぞ、さっさとしろ。」

先生、その飴と鞭くせになりそうです。

寮についた。部活や一夏達みたいな自主練をしてない生徒はもうこ
の時間帯に寮にいるようで廊下で談笑している。

「見て。織斑先生よ。」

「お姉さまああ！」

「あ、後ろにいるの例の転校生じゃない？」

「ホントだ！声かけてみようかな。」

「行っちゃいなよ。」

なんだか客寄せパンダの気分だ。落ち着かない……。織斑先生は全然気にしていないようだ。

「君達。通してくれ。」

「「すいません。先生！」」

むしろどうどうとしている。もう姉御と呼ばせてください。

「ココなんだが……」

そして部屋に到着。

「なにか問題でもあるんですか？」

たとえばでるとか？なにが？アレが。……

「夜にな、出るらしいんだ。幽霊が。」

「うわあああああああああああああ」

「冗談だ。」

「……」

「実はな。この部屋は元々荷物置き場として使われていたんだが今はほとんど使われていない。つまり中は埃だらけだ。」

なんで冗談挟んだんだよ。真顔で言うなよわかりにくいわ。は？こ

わがってねーし。は？ふざけんなよこわくねえつつてんだろ。

「つまり使っなら掃除をしろってことですか。」

「まあそつゆうことだ。」

「なんだ。そんなことですか……。それくらい全然おっけーだつてうわ！汚っ！」

なんで弁当の容器が置いてあるんだよ……。え……。この本なんぞ「それじゃ、がんばれよ。」先生！待ってえええ！」

くそっ見捨てられた……。まじかよ、こんなんじゃ寝られねーよ。はあ、片付けるか。

——二時間後。

「やっと片付いたあああああああ！！！！」

生まれ変わった部屋に満足しながら、ベットにダイブする。あ、やべ。眠くなってきた……

コンコン。

ドアをノックする音。誰だよ、眠いのに。

「伊波、いるか？ 織斑だ。」

姉御か。「開いてますよ。どうぞー」

「ほう、きれいになったじゃないか。」

「そりゃ2時間もかけて念入りに掃除しましたからね。もうこの部屋は俺のものです！ 出て行けって言ったって動きませんから！」

「それはかまわないが、そんなことより伊波お前に専用機が届いたぞ。」

ん？ せん・・・なんだって？

「専用機？ 初耳なんですが。」

「うん？ 束に聞いていないのか？」

「なにを・・・？」

「はぁ・・・まったく。アイツが直々にお前の専用機を作った。半年間の手伝いのお礼、だそうだ。」

ま、まじすか・・・！

「機体は第3アリーナに待機させてある。今からいくぞ。」

了解です。それにしてもあの束さんが……。そして第3アリーナに到着。

「ん？ちふ・・織斑先生、それに涼太も。いったいどうしたんだ？」

一夏の一言に筈、セシリア、鈴が集まってきた。

「一夏？あ、先生どうしたんですか」

「涼太さん、どうしてこちらに？」

もう名前に関しては突っ込まない。好きに呼べよ……。そのかわり俺も好きに呼ばせてもらうからな。

「いやね、俺の専用機が届いたらしいんだ。」

「あれ？アンタ昼に自分は専用機持ちじゃないって行ってなかったっけ？」

いや……。そうなんだけどさ。さっき知ったんだからしょうがないだろ？

「おい、行くぞ。さっさと終らせて私は休みたいんだ。」

えええ。生徒の前でそれ言うか……

「これがお前の専用機”黒鉄”（クロガネ）だ。」

黒鉄……。打鉄真つ黒にしてみました的な？

「見た目通り打鉄式と並ぶ打鉄の後継機だ。機動力、旋回性能、耐久性すべてにおいて底上げされている。」

おお、てか見た目超かつこいいんですけど！マジ束さんわかってるう！

「刀を抜いてみる。」

言われたとおり抜刀。

「……刀身が黒い。」

ここも黒。全部黒。よし。このISをクロスケと命名しよう。

「打鉄の刀に比べ、軽量化され振りやすくなっている。耐久度は変わらないそうだから安心しろ」

軽なこれ。すぐ折れそうだけどホントに大丈夫なのか・・・？

「では、話は以上だ。明日は実習がある。しっかり休めよ。」

「了解です。失礼します。」

黒鉄を待機状態にし、その場をあとにする。

プレスレット

「涼太ー。」

一夏？それに皆も。

「まだやってたのか？いい加減やめたほうがいいんじゃない？時間的に。」

「ちがうわよ。アンタを待ってたんじゃない。」

俺を？

「涼太さんの専用機を見せてもらおうと思ひまして。」

あーなるほど。

「いいよ。こいクロスケ。」

直後俺の体が真っ黒い機体に包まれる。

「黒っ！ー！」

いいリアクションだ鈴！

「打鉄・・・なのか？」

「いや、打鉄の後継機にあたる機体らしい。君のお姉さんがつくったんだと。」

「姉さん……。」

なんか考え込んでしまった。長くなりそうだなあおい。

「な、なあ！はらへらね？食堂いこうぜー。」

早く帰りたいんだよ。疲れてんだよ。

「そうだな。俺も実ははら減ってたんだ。」

ナイス一夏。もうさっさと飯食って寝よう。

「おーい、行くぞー筈。」

「ん？お、おい！私を置いていくな！」

それにしても束さんが俺にプレゼントとは……。なにかの前触れじゃなきゃいいけど。

第4話 きたぞ！IS学園 後編（後書き）

書いてる途中に気づいた打鉄式式の存在。でもいまさら後には引けないよ・・・。

第5話 転校生と模擬戦と（前書き）

一話一話みじかいんじゃないかね？って思ったので今回は長めです。

なので読みにくいかもしれません。

まあものは試しとゆうことで・・・。

第5話 転校生と模擬戦と

その日の朝はなんだかいつもより騒々しかった。

—— ねえ、聞いた？あの噂。

—— え？なにになに？

なんかあつたんだろうか。この時期になにかあつたっけ……。転校生のことか？

「なあ、なんかあつたのか？」

端の席にあつまっていた篤とセシリアに問いかける。

「さあ、私は何もしらないぞ。」

「私もですわ。」

二人も知らない？てかこの二人なにげにクラスから浮いてる……。話混ざってくればいいのに。
俺も言えないけど。

「おはよう。なに盛り上がってんだ？」

そんなことを考えていたら一夏がやって来た。一夏も知らないのか。

「涼太。何の騒ぎだよ。」

俺が知るか。

「席につけ。HRをはじめろぞ。」

なんかめんどくさそうな予感しかない……。

第五話 転校生と模擬戦と

「今日も転校生を紹介します。」

その言葉にクラスが沸き立つ。ああそうか、俺と一日違いだったんだな。

教室のドアが開き、金髪の美少年が入ってくる。正直正体を知ってる俺からすれば美少女にしか見えないが。

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。皆さん、よろしく願います。」

——きゃあああああああああああ……！！

発狂している女子達を横目にこれからのことについて少し考えてみる。

俺の知っている内容通りにいけば明日一夏に正体がばれてシャルルの暗い過去について語られるはずだ。

そのとき俺はどうするかだけど……。その場に同席するか、それとも女だと知らない振りをしているか。
うーん……。悩む。

「それから織斑、伊波。」

考え事をしていたら織斑先生に呼ばれた。

「デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。それでは解散」

面倒を見てやれ、か……。まあそのときになったら考えよう。関わっても関わらなくてもストーリーの本筋はかわらないだろうしな。

女子達が教室で着替えを始めたので俺と一夏はシャルルを連れてアリーナの更衣室に来ていた。

廊下で女の集団に襲われかけたがなんとか逃げ切った。

あと一夏、お前誰とでも手繋ぐのやめたほうがいいと思うぞ？そっち系のヤツだとおもわれてもしらねーぞ俺は。

「ごめんね。いきなり迷惑かけちゃって。」

「気にすんなよ。同じ男同士だろ？」

「だな。」

「ありがとう。二人とも。」

「これからよろしくな。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。」

「伊波涼太。俺も涼太でいいよ。よろしくなー。」

「うんよろしく一夏、涼太。僕のことシャルルでいいよ。」

自己紹介も済んだしさつさと着替えないと。そろそろ時間がやばい。もう織斑先生の愛の鞭は嫌だからな。^{体罰}そう思い上着を脱ぐ。ソレを見て一夏も着替え始める。

「うわっ!！」

いきなり後ろから奇声が聞こえた。振り向くと両手で顔を覆っているシャルルがいた。

あー・・・そっか、恥ずかしいのね。

「早く着替えないと遅れるぞ。ウチの担任はそりゃ時間にうるさい人で・・・。」

「う、うん。着替えるよ?でもその・・・あっち向いてて。ね?」

あんまじろじろ見てもかわいそうなので後ろを向きスーツに袖を通す。

これ肌に張り付いて落ちつかないんだよなあ。

「って着替えるのはえーのな。なんかコツでもあるのか?シャルル。」

」

「え、べ、べつにないけど。」

「てゆうかそれ着やすそうだな。」

「うんこれはデュノア社製なんだよ。――。」

お前ら全然急ぐ気ないだろ・・・。

「本日から実習を開始する。」

今日は専用機持ちが各グループのリーダーとなってISの基本操縦を練習するらしい。

で、その前に戦闘の実演があるらしく、これから呼ばれる生徒は山田先生と模擬戦だそうだ。

たしかセシリアと鈴だったよな？速攻でやられてた気がする。

「伊波涼太。前に出る。」

・・・・・・はい？

「おい、いないのか伊波！」

「い、います！」

な、なんで俺！？しかも一人かよ！？

「一度で返事をしろ、ばか者。そしてさっさと準備をしろ。」

「せ、先生！俺一人だけなんですか！タイマンなんですか！？」

ありえないだろっ！？2対1でも負けてたのに・・・！

「たしかに山田先生相手では今のお前らには荷が重いだろう、だが。」

そこまで言った後、俺にしか聞こえないよう耳元でこうつぶやいた。

「半年間アイツの元で助手をしていたんだろう？お前の実力がどれくらいのものなのか見せてみる。」

無茶苦茶すぎるぞこの先公……。だいたい助手じゃねーし、ただのモルモットだし。

「よし。それでは始めるぞ。」

「がんばって涼太！」「涼太、負けるなよ！」

無茶言つなよ一夏……。くそっ！もうどうにでもなれ！

相手は昨日転入してきたばかりの男子生徒。専用機だって届いたばかりらしい。

それなのにどうして織斑先生はわざわざ伊波君を指名したんだろう。彼にはなにかあるってことなのかな？

「こい。くろすけ！」

その声にあわせ、彼の体を覆うように姿を現す打鉄のもうひとつの後継機”黒鉄”。

武装はそのままに全体のスペック上昇に力を入れて作ったISだそうだ。

織斑先生が彼に何を期待しているかは知らないけれど、武器がブレードだけなら遠距離戦闘を主体とする私とは正直いって相性が悪い。ある程度距離をとっていれば完封できるはず。大丈夫、負ける要素はどこにもない！

このとき真耶は完全に油断しきっていた。

相手は専用機を持つているがそれは男とゆう特異体であるから。操縦者としての腕はまだまだだろう、と判断しこの後激しく後悔することになるとは夢にも思っていなかった。

「それでは、はじめ!!」

織斑先生の合図とともに右手のスナイパーライフルを標的に向ける。伊波君には悪いけどこの勝負一方的に勝たせてもらおう。

そう思いスナイパーのレンズに顔を覗き込んだ瞬間、私は目の前の光景に驚愕する。

なぜなら彼がすでに私のすぐそばにいたからだ。
ブレードの間違い

イグニッションブースト
「瞬間加速!？」

気づいたときにはもう遅い。伊波君はブレードを思い切り振りかぶり、

——私『ラファール・リヴァイブ』を地面に叩き落とした。

side 涼太

奇襲はうまくいった。だけどそこで終わりじゃない。なんせこっちはブレード一本で戦ってるんだ。

相手に距離をとられたらその分不利になり勝利は遠のく。紅椿戦のときみたいに一旦落ち着こうなんて思っていたら間違ひなく負ける。だからこそこで一気に畳み掛ける!

最高速度を保ったままラファール・リヴァイブ目掛けて突きをくり

だす。立ち上がる隙なんて与えない。

そこ、卑怯とかいわない。・・・だがその追撃は地面を転がることにより回避され、直後俺の右肩に衝撃がはしる。

「（くっ！アサルトライフルか！）」

その弾丸によってシールドが3割程削られてしまう。しかし相手はまだその場から離脱できる状態ではない。だったら今のうちに片をつける！

懷に踏み込み、連撃の応酬。だがラファール・リヴァイプを守る実体盾がうざいことこの上ない。

こちらの攻撃がすべてガードされてしまう上に攻撃モーションの合間にライフルを打ち込んでくる。さすが山田先生と言ったところか。シールド残量がどんどん削られていく。でも攻撃を緩めると離脱されてしまうのでソレもできない。

「くっそ！！」

俺はこのジリ貧状態に完全にはまっていた。

side 一夏

「すげえ・・・。」

山田先生と涼太の戦闘を見て圧倒される。昨日会ったばかりで涼太

のことはほとんど知らないが、
少なくともISにはほとんど乗ったことがないだろうと思っていた。
なぜなら同じ男の俺がそうだったから。
しかし目の前の光景がそれは否だと訴えてくる。あきらかに初心者の動きじゃない。

「うん。涼太のあの機動力、それを抑える山田先生の技量。どっちもかなりの実力者だ。」

シャルルが2人についての感想を述べる。他の皆の顔をみてみるとやはりあの2人に驚いているようだ。
だが一人だけ驚いていない人物がいる。千冬姉だ。

「なるほど。半年間ただなんとなくISに乗っていたわけじゃないようだな。」

うん？なにかつぶやいているが、声が小さくて聞こえなかった。半年がどうか・・・。

まあそんなことより、と目の前の戦闘に視線を戻す。

「（いつか俺もあんなふうに・・・。）」

涼太に負けないくらい強くなつてやる！

side 真耶

正直、最初の奇襲からの追撃には驚いた。しかしそれは油断してい

た自分が悪い。

接近戦のみで戦う伊波君に間合いをつめる術がないなんてことはありえない。少し考えればわかることなのに……。

教師として自分が恥ずかしい。まだまだ未熟だ。だが後悔は後にしよう。

今は目の前で猛攻を繰り出している彼を倒すことに集中しよう。

現在私のシールド残量は6割。たぶん伊波君の方はあと2、3割程度だろう。

このまま押し通せばなんとか勝てる！

そう思っていた矢先、状況が変化した。

——涼太が実体盾もろともラファール・リヴァイブにタックルをしにかけてきたのだ。

かなりの衝撃に襲われる。おそらく瞬間加速で勢いをつけたのだらう。イグニッションブースト

当然私の体勢は崩れ、一瞬よろけてしまう。その隙を相手が見逃すはずがなかった。

地面を削りながら怒涛の切り上げ。

その攻撃により盾が弾き飛ばされる。

「ま、まだまだ……！」

ようやく動けるようになった私は即座にライフルを構え至近距離で打ち出す。ソレと同時に左肩に振り下ろされる黒い大太刀。

【シールド残量低下。残り3割。】

「（このままラッシュに持ち込まれたら負けるっ！）」

そう思った直後にISからアナウンスが流れた。

【敵ISの撃墜を確認。】

え……？か、勝ったの？

side 涼太

くっそー！まけたー。

悔しがっている俺に織斑先生が話しかける。

「2人ともいい戦いだった。他の生徒たちにとっていい刺激になっただろう。」

それはよかったっすね。はぁ……俺まけてばかりだなぁ……。

「伊波君！素晴らしい機動力と状況判断でした！最後の反撃はかなり冷や汗ものでしたよ……。」

山田先生1年生相手に本気にならないでくださいよ、強すぎです。それと今の戦闘で疲れたんでもう休んでいいですか？

「ダメに決まっているだろう。これからお前にもグループのリーダーになってもらうんだからな。」

お、鬼！ここに鬼がいるぞおお『パアアン！！！！』うぐおお！！

「うるさい、黙れ。それでは次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやること。では分かれる。」

なんで実習の時間に出席簿持ちだしてんだよ……。それ叩くためのものじゃないぞ！

つたく、これだから新人教sいやすいませんでしたなんでもないです。

ま、まあどうせ？実習だつて一夏とシャルルのところに集中するだろうし？

だいじょうぶだ「「「「「伊波くうううううん！！！！」」」」

！！！！！！？　　ちょ、ちょ！な、なに！！！！？

「伊波君さっきの戦いすごかったよー！私もあんなふうには操縦できるようになる？」

「伊波君私におしえてー！」

「私伊波君に教えてほしいな！」

「いなみん。おつかれさま」

・・・ま・・・じ・・・か・・・orz　普段だつたら超うれし
い展開なのに今に限っては最悪だ・・・。
それと最後の人、いなみんって・・・。いいネーミングセンスして
るじゃねえか・・・！！

「うん。皆よろしく・・・。」

気合いで乗り切ろう・・・。

なんとか気合いで実習を乗り切った俺は只今屋上で皆と一緒に昼食を食べていた。

「えーっと僕も同席してよかったのかな？」

シャルルが遠慮しがちに聞いてきた。

「一々気にしすぎだって。誘ったのは俺達なんだからいいに決まってるじゃん。」

「そうだぜ、男子同士なかよくしようぜ。」

ホントシャルルは気にしすぎだよな。まあ家庭環境のせいであんなったのかもしれないけどさ。

「それにしてもいいよな2人とも。」

いきなり一夏が俺とシャルルを見ながらつぶやく。いいつてなにがだよ？

「今日から同室だろ？俺一人だからうらやましいぜ。」

・・・なるほどそうかそうか。・・・困ったことになったな。
女子と同室なんて落ちつかねーよ・・・。

「あ、うん今日からよろしくね？涼太」

「俺今初めて知ったぞ・・・。」

「はあ！？シャルルが自己紹介した後千冬姉がいつてたる！」

言っただか・・・？あ、そーいや考え事してて聞いてなかったかも。

「もしかして涼太・・・嫌だった？」

嫌じゃないから！その捨てられた子犬みたいな目やめてくれっ！

「全然いやじゃねーよ！？むしろ一人は飽きたとこだったよ！」

「飽きたって・・・昨日転校してきたばっかじゃないアンタ。」

うるせえよ空気よめよ。酢豚って呼ぶぞコラ。

「そっか、よかったあ・・・。」

なんでシャルロットが人気あったのかわかった気がするよ・・・。

「ん、んん！一夏さん？私今朝たまたま、早く目が覚めましてこんなものを用意してみましたの。」

いきなり話に乱入してきたセシリアが持っていたバスケットの中身を見せる。・・・うまそうだな。見た目は。

「どうぞ、食べてみてください。」

「なあセシリア。俺も食っていい？」

さっきの模擬戦のせいですごい腹減ってるんだ。見た目大丈夫そうだし、いけるっしょ。

「ええ、たくさんございますからどうぞ。」

「ありがとうございます。」

もらった卵サンドを口に入れる。その瞬間

jついああpぢおb vぱふぢすh f! ? D + ! ? ! ? ! ?

「いかがですか？お二人とも。どんどんいただいてもらってかまいませんのよ。」

一夏の顔が青い。たぶん俺もあんな感じなんだろうな・・・うぶっ・・・。

「あ、いや・・・あとでもらうよ。」

「うん、おいしかった・・・ありがとセシリア・・・。」

すごいなこれ。横にいるさわやか貴公子にも幸せをわけてやるっ。

「シャルル。お前もひとつもらえよ。セシリア、いいよな？」

よしこれで。っておい一夏やめろ、シャルルにいらんこと吹き込むな。

「もちろんよろしくてよ。」

「じゃあひとついただくよ。」

ハムサンドらしきものを手に取り、口に運ぶ。

・・・あれ？大丈夫そうdいや、汗の量が半端ないやw

「おいしいよセシリア・・・。」

必死に笑顔を崩すまいとする貴公子の姿にあっぱれをあげたい。うん、幸せは皆で分かち合うもんだよな。

そのあと箒と一夏のあーんイベントがあったり、それをセシリアと鈴がうらやましがったり、

いつも通りにぎやかな昼食だった。

夜

「今日は大変だったね」

緑茶を飲んでいた俺にシャルルが話しかける。

「ん？ああサンドイッチのことか？いや、あれもいい勉強になった
と思えば・・・」

「ちがうよ、模擬戦のこと。サンドイッチのことは誰かさんのせいで僕もトラウマだよ。」

シャルルがジト目でこちらを見てくる。何を言っているのかさっぱりわからない。

「あーうん。山田先生強かったなあ。さすが元代表候補生。」

「そうだね。でも涼太もすごかったよ？ブレード一本で山田先生をあそこまで追い込んだんだから。」

正面からそういわれると正直照れる。・・・しばしの沈黙。あー緑茶じゃなくてコーヒーにすればよかった。

「ねえ、涼太も一夏達と一緒に放課後ISの特訓してるの？」

「いや？てゆうか俺も昨日転校してきたばかりでさ。誘われたけど荷物の整理とかでいけなかったんだ。シャルルも混ざりたいのか？」

部屋があそこまで汚くなかったら少しは参加できたんだろうな。なんで壊れたピアノなんておちていたんだか。
運び出すのに30分かかったぞ。

「うん。僕も専用機持ちだからすこしは役に立てるかなって思っ
ね。」

ホントはデータをとろうとか考えているんだろうか。まあばれるん

だから関係ないか・・・。

ってあれ？この状況だと誰にばれるの？

「涼太？どうしたの？おい。」

・・・俺じゃん。

「涼太ー。涼太！」

「あ、わりわり。明日一夏に聞いてみれば？大丈夫って言うとおも
うよ。」

「うん。そうするね。」

どうしようこれから・・・。

第6話 暗い過去（前書き）

今回は主人公がやたらかつこいのお話です。

第6話 暗い過去

「伊波、ちよつと来い。」

朝のHRが終わり一限目の授業の準備をしていた俺は、いきなり織斑先生に廊下に呼び出された。

なんかやらかしたっけ？と心配になるが、最近の行動に思い当たる節がない。なんで呼び出されたんだ？

「お前を呼び出したのは他でもない、ボーデヴィツヒのことだ。」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生で一夏ヒロインズの中の一人。ついさつきHRで転校生として紹介されていたが、俺と何の関係が……？

「先生、俺とそのボーデヴィツヒさんとなんの関係があるんですか。」

「お前もさつき見ていただろう。あいつが織斑を殴るところを。」

見ていたとゆうか、目の前で勝手に繰り広げられていたとゆうか……。

「ボーデヴィツヒは私がドイツ軍の教官をしていた頃の教え子だ。だからアイツがどんな奴なのかはある程度わかっていると自負している。」

……結局なにが言いたいんだこの人。

「理由は知らんがアイツは織斑を憎んでいる。そこでお前に頼みがある。」

こちらを真剣な表情で睨んで・・じゃない見ている。織斑先生から俺に頼み事なんていったい何事だ!?

戦慄する俺を尻目に彼女はためらいがちにこう続けた。

「ボーデヴィツヒを、見張っていてほしい。」

・・・・・は?

「はい?」

「だからボーデヴィツヒを見張っていてほしいと言っているんだ。」

い、意味がわからない・・・。何で今の話の流れでその頼み事になる?前置き長かつたくせに全然理解できないんですけど。

「先生、それ冗談なんかですか?すぐくつまらないです。」

そうゆうのいいからさっさと用件を話してほしい。

「喧嘩を売っているのかお前は。私は本気だ。それと私は冗談が大嫌いだ。」

どの口が言つかどの口が!アンタちよつと二日前の自分殴って来い。しかしまあ頼みごとは本気らしいが。

「ボーデヴィツヒは軍人としては優秀だが中身は世間知らずの子供

だ。もしかしたら感情に身を任せてなにかやらかすかもしれん。だからこうしてお前に頼んでるんだ。」

・・・そうゆうことか。

「つまり先生は一夏が心配でたまらないからボーデヴィツヒさんを監視しとけと、そう言ってるんですね。ああすばらしい姉弟愛d」
「パアアアアン！！」ぐほっ！！」

いきなり出席簿で後頭部を叩かれた。なぜに！？あとソレどこから出したし！

「下らんことを言うなばか者。教師が生徒を気にかけるのは当然のことだろうが。」

「ツンデレ乙」

『パアアアアン！！！！！！』

やめてください、脳細胞が死滅してしまいます。

「それでどうなんだ？引き受けてくれるのか？」

右手の出席簿をいつでも振り下ろせる状態にセットしたまま再度頼まれる。どうやら俺に拒否権はないようだ・・・orz

「・・・喜んで引き受けさせていただきます先生。」

拝啓、束さん。貴方の幼馴染様は今日も絶好調のようです。

第6話 暗い過去

放課後

「（うーん、見張ってる、ねえ）」

今日も授業を何事もなく終らせた俺は、今朝織斑先生に頼まれた・いや脅迫された内容を思い出していた。

ラウラを観察しながらどうしようか考える。そんな俺に一夏とシャルルが話しかけてきた。

「涼太！今日もISの特訓するんだけど、お前もこないか？シャルルもくるぞ！」

「うん。涼太も一緒に練習しない？」

残念だが今回も用事があるため特訓に付き合っことができない。

「あーわり、今からちよつと用事があるんだ。また今度な！」

残念そうな2人を横目にラウラが教室から出たところを確認する。よし、行くか。

「それじゃな二人とも！」

二人に別れをつげ、俺はラウラの後を追った。

誰に話しかけるでもなく、足早にどこかに向かっているラウラ。俺は自分の中の記憶を引っ張り出しこの後のラウラの行動を思い出す。

「（たしかこの後一夏にケンカふっかけるんだったよな。）」

なら最初からアリーナいけばよかったんじゃない？と今更後悔する俺。そうすれば一夏の特訓にも少しは付き合えただろうに。その話は一旦置いて、意識を前を歩くラウラに戻す。

「（なんで校舎裏の方に向かっているんだ？アリーナに行くんじゃないのか？）」

織斑先生と約束した手前放置するわけにもいかずそのまま追うことにする。ラウラが曲がり角を右に曲がる。それに従い俺も後を追うが、

「あれ？居ない……。」

彼女はどこにもいなかった。この先は長い一本道で見失うはずがない。いったいどこに……。そんなことを考えていると突然背後から誰かに話しかけられた。

「貴様なんのつもりだ、なぜ私をつけまわす。」

まさかと思い、振り返る。すると案の定、いかにも不機嫌そうな顔のラウラ・ボーデヴィツヒが立っていた。

「（ばれてた！？ってこの状況はまずいぞ！）」

言い訳しようにもこんなところにくる理由なんて見当たらない。そこで俺はふと気く。もしかして誘い込まれた？

「おい、私の質問に答えろっ！！」

ドスの効いた声で俺を怒鳴りつけながら近づいてくる。そういえばこんなこと前にもあったな。思い出すのは束さんと初めてあったあのとき。この子は銃を持っていないがあの時と同じくらい命の危険を感じるのはたぶん相手が軍人だからだろう。

しかしまあさすがに2度目だ。こんなことには慣れなくなかったが、驚くぐらい頭は冴えている。覚醒した俺は冷静にこの場を乗り切るためにある行動をとった。

「あ、ああ！織斑先生じゃないですか！！こんなところでなにやってるんですか！？」

「なに？教官？」

ラウラの後方を指差しながら大声で叫ぶ。それにつられて後ろを振り向くラウラ。ま、まさかひっかかるとは。その隙に俺は全力で逃げ出した。

「ん・・・？どこに教官が・・・って貴様！だましたな！」

ものすごく古典的な作戦であつた。それにひつかつたラウラに乾杯。だがすぐ気づいたラウラは一瞬遅れ、俺を追いかけてくる。足の速さでは俺もまけていないようだ。

「待て!!」

後ろでなにやら叫んでいるが無視して撒くことだけに集中する。昔の偉い人は言つた。待てといわれて待つバカはいない。

「このっ！待てといっているだろうがっ!!」

その怒鳴り声と共になにかが俺の頬を掠り、目の前の建物に突き刺さつた。

「ナ、ナイフ!?!」

彼女はまだ子供で何をしでかすかわからない、織斑先生の言つていた通りだつた。

その後俺は後ろから飛んでくる凶器に戦々恐々しながらもなんとか寮内に逃げ込むことに成功する。どうやらもう追つてきていないようだ。

「た、たすかつた・・・。」

寮の廊下を歩きながら小さくつぶやく。それと同時に今後毎日教室で顔を合わせないといけないことを思い出し、大きくため息を吐いた。

「（今日はつかれた。もう寝よう。）」

心身共に疲れた俺は自室のベッドに向かうのであった。

忘れていたわけじゃない！まだ帰ってきてないだろうと思ってただけだ！・・・誰に言い訳してるんだよ俺は。

目の前の光景に動揺しすぎて少しおかしくなっているようだ。そうなるのも無理はないはず。だって

「りよ、涼太・・・。」

目の前にバスタオル一枚のシャルルがいたんだから。

「・・・そ、そのままだと風邪引くぞ？」

「う、うん。」

その言葉にシャルルはシャワールームに戻っていった。動揺しながらも相手を気遣えた自分を褒めてやりたい。

・・・さて、どうするか。いきなりシャルルの暗い過去を聞くことになったわけだけど・・・。

俺はそれを聞いて彼女にちゃんとした言葉をかけてあげられるんだろうか。いやたぶん無理だろうな。

でも一夏の言葉を真似るなんてこともしたくないし。それなら俺は・・・。

シャワールームから戻ってきたシャルルにベッドに座るよう促す。

「涼太・・・その・・・」

「・・・早速なんだけどなんで男装なんてしてたのか、聞かせてくれないか？」

俺は、俺自身の言葉で思っていることを伝えてみようと思う。

side シャルル・デュノア

「・・・早速なんだけどなんで男装なんてしてたのか、聞かせてくれないか？」

涼太は真剣な表情で僕に聞いてきた。たぶんこの話をしたら涼太に嫌われちゃうと思う。でも、僕は話さないといけない。彼をだましていたんだから。

「うん・・・。昨日僕がデュノア社の社長の子だつてゆう話をしたよね？その社長、父の命令でね。このIS学園にきたんだ。」

「・・・」

「僕はね涼太、父の本妻の子じゃないんだよ・・・。父とはずっと別々に暮らしていたんだけど、二年前に引き取られたんだ。お母さんがなくなつたときデュノアの家の人を迎えにきてね。それで色々検

査を受ける過程でIS適正が高いことがわかって。それでテストパイロットをやることになって、でも父にあったのはたったの二回だけ……。」

「……。」

涼太はなんの反応もなく僕の話の聞いている。そうだよ、僕の昔話なんて興味ないよね……。

「その後だね、経営危機に陥ったんだ。デュノア社も第3世代型の開発に着手をしているんだけどなかなか形にならなくて。それで僕が男のふりをするようになったんだ。」

「俺と一夏のデータを取るために？」

「うん。それと注目を浴びるための広告塔って意味もあるかな。はあ……ホントのこと話したら楽になったよ。ありがとう、それと今まで嘘をついていてごめん。」

ふう。もうこの学園ともお別れか……。二日間だけだったけど楽しかったなあ……。

「それで？シャルルはこれからどうすんだ？」

うん？なんでそんなこと聞くんだろう。涼太の考えていることがよくわからない。

「どうって、女だつてことがばれたから本国に呼び戻されると思う。良くて牢屋行きかな。」

僕の言葉を聞いて涼太はなにかを決心したように僕に向き直り、話し始めた。

「うん。話を聞いていてこれから俺の思ったことを言うけどシャルルが嫌な思いするかもしれない。だから先誤つとく。ごめん。」

いきなり涼太に誤られた。な、なんで？このあと言われた涼太の言葉によって僕はさらに混乱することになった。

「それじゃ遠慮なく。お前の親父つてさ、最っ低の糞ヤロウだな。」

「……え。」

「だってそうだろ？奥さんいるのによそで女抱いて、子供まで作って、挙句の果にその子供まで自分のために利用する。生きてる価値すらねーだろ。同じ男として恥ずかしいわ。俺がお前だったら――」

「――。」

「……なんでこうなつたんだろ。目の前で僕の父親がものすごい勢いで罵倒されてる。ソレに対しては別になんともおもわないけど、とりあえず止めないと！」

「だいたいなんでそんなやつが社長やつてんの？もう他のやつとかわ」 「ちよ、ちよつとまつて！」 「……なに？」

涼太が僕のために怒ってくれたのは予想外の出来事だったけど、その前に聞かなくちゃいけないことがある。

「そ、それ以外になにか僕に言うこととか、ないの……？」

「・・・それ以外って？」

「だから、その・・・僕、涼太をだましてたんだよ？」

「うん。そうだな？」

そうだなって・・・。ホントにわかってるのかな涼太は。

「わかってるよ。」

え・・・？

「男友達だと思ってた奴が実は女の子でした。なんてたしかにびっくりしたけど、それだけだろ。」

「けど本当は涼太はちゃんと僕の言いたいことをわかってくれて、データを取るために近づいてたってのはちよつと悲しいけど、ソレ抜きにしてもシャルルがいい奴だってことは十分わかってるから。」

その上で僕のことをちゃんとみてくれて、

「俺にとつてはだまされてたってことより、大事な友達がいなくなることのほうがよっぽど大事件だ。」

だましてた僕のことを今でも友達だつて言ってくれて、

「だからここにいろよ。シャルルが少しでも悪いって思ってるなら

「ここにいろ！」

僕に居場所を作ってくれようとしてくれる……。涼太は本当にやさしい人だね。でも

「でも、僕がここに居たいって思っても、きっと本国から帰還命令が……」

「それは大丈夫！……だったような、ちょっとまってくれ。」

涼太がバックをあさって何かを探し始めた。そして手に取ったのは……生徒手帳？

「あ、あつたあつた！ほら、ここ読んでみ？」

手渡された生徒手帳の開いてあるページを読んでみる。

「えーと？IS学園特記事項。本学園の生徒は、その在学中においてありとあらゆる組織、国家、団体に既存しない……？」

「ほらな！いやぁ一夏はすげえな。こんなの55個も覚えてるなんて……さすが主人公は各がちがつた。」

つまりここにいる間は大丈夫だつてことを言いたいのかな？それなら……。僕はさっき涼太が言ってくれたことをもう一度だけ聞いてみた。

「涼太、僕ここにいてもいいのかな……。」

涼太は僕のその言葉に笑ってこう答えた。

「あたりまえだろ？むしろ逃げたら許さねーから。」

この言葉がうれしくて僕は涼太の手を取って、

——ありがとう、涼太。

心からそう言った。

side 涼太

目の前で笑っているシャルルを見るとどうやらうまく言葉を伝えられたようだ。途中自分の言葉で恥ずかし死にするかとおもったが、もうこんなことぜったいやらない。

それにしてもシャルルさんはなぜ俺の手を握っているんだろうか……。まあ全然いやじゃないからいいんだけどさ。むしろ嬉しいけどさ。

——トントン

「涼太、シャルルおれだけど、飯くいにいかなーか？」

ドアをノックする音の後に一夏の声が聞こえてきた。タイミング悪すぎワロタ。俺はシャルルをベッドに寝かせ、ドアを開ける。

「お二人とも夕食はまだでs・・・シャルルさんはどうかしたんですの？」

いや・・・その言葉そのままお前らに返す。

「シャルルはちょっと体調がわるいらしくて寝かせてたんだ。それより一夏、両手に花だなお前・・・。」

一夏をはさむように女二人―セシリアと箒―が両腕に組みついていてた。それどんなエロゲ？

「アハハハ・・・まあな・・・。それよりシャルル、大丈夫なのか？」

「う、うん。ゴホツゴホツ。だいじょうぶー。」

ええ・・・。演技下手すぎだろ・・・。

「そうか・・・。しっかり休んで早く直せよ？」

ええ・・・。だまされてるう・・・。

「そうゆうことだから俺シャルルを見てるよ。夕食は三人で行ってこい。」

俺の言葉に一夏は渋々女二人を連れて食堂に歩いていった。結果また二人だけになった。

「それにしても一夏ほんともてるよな。爆発すればいいのに。」

「爆発！？で、でも涼太もクラスの女の子に人気あるじゃない。」

そうなのか？俺人気あるのか？まじでか！？やっベテンションあがってきた！！

「シャルル、今の俺は機嫌がいい。飯を取ってきてやろ。なにがいい？」

「あ、うん。それじゃあ涼太と同じものでいいかな。」

「任された。」

そのあと食堂でオムライスを二つもらってきた俺はシャルルと楽しく夕食を取った。

あゝんイベントとかすっかり忘れていたのは内緒だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2983z/>

とある男のISな話

2011年12月24日01時06分発行